

史遊会通信

No. 182
平成21年2月行
12月発

事務局
03-3712
0651 下山田方

例会のお知らせ

◎ 1月 総会
日時 平成22年1月27日(水)
午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階
社会教育館 第2研修室

今年感動した三冊の本 特集

①『吾妻鏡の謎』

柴田 弘武

奥富敬之著 吉川弘文館
鎌倉史の権威であった著者の最後の著作である。氏は本書の出版を見ることなく逝去された。しかし最後まで「榮しそうに執筆されていた」とのことである(編集部
「後記」)。

としたのだ」という、得宗家の歴史の正当化を試みたものであった。『吾妻鏡』が文永三年で終わっていることは、それ以後得宗家の内紛が始まり、もはや上記得宗家の弁解も通用しなくなつたからだろうと述べた上で、執筆者は複数であつたが統括責任者は金沢流北条貞顕ではないか、と大胆に推定する。

●総会
議題 *前年度事業報告
*同会計報告
*22年度事業計画
-*その他

●総会終了後例会
講演 森下征一氏

テーマ 未定

自由執筆は鯨游海・松川博光
太田精一の諸氏
締切り 1月31日
字数19字75行前後
(題5行分を含む)

『吾妻鏡』は鎌倉史を語るときの最重要文献であることは万人の認めるところである。しかし「だれが、いつ、なんのために、どのようにして執筆編纂したのか」一切不明という謎の書である。著者はその謎解きを試みて、北条得宗家が「世のため人のため、源氏三代にかわって、善政を布こう

確かに頼朝の死の前後をはじめ、いわゆる「脱漏」の記事が少なくないこと、実朝の暗殺に関連しても明白な「嘘」が書かれている(『愚管抄』の記事との対比)等、『吾妻鏡』は一見実録風でありながら、そのまま信用すると危険な歴史書であることがよくわかる。

また「一揆」や「独歩」などという鎌倉

時代特有の用語の説明や、「御恩」「奉公」「忠義」などという言葉は『吾妻鏡』には全くない、という指摘などは、目からウロコの落ちる思いであった。

②『五郎兵衛日記』

成毛五郎兵衛著 内山朝治発行
成毛五郎兵衛と言つても知つている人は殆どいない。本書も限定三〇〇部の発行である。しかし大原幽学を知つてゐる者にとっては馴染みの人物である。

幽学の高弟で、成田市長沼の百姓である。幽学が疲弊した東総の農村を立て直すために、先祖株組合をつくつて成果を上げはじめると、いわゆる「改心樓事件」をきつかけに幕府の嫌疑を受け、嘉永五年（一八五二）から江戸での取り調べが始まる。裁判は安政四年（一八五八）まで続く。その間幽学は殆ど江戸で暮らざるを得なくなる。その幽学の江戸在住を経済的に援助し続けたのが、東総の幽学の弟子たちであり、その江戸での援助活動の克明な記録を綴つたのが本日記である（かつては「在府日記」と呼ばれた）。

時あたかもペリーの浦賀来航に始まる幕末動乱の始まりであった。その儂たらしい

時代の市井の動きや、江戸時代のお白州の

有様、幽学を支援する御家人高松彦七郎父子の様子などが活写される。例えば幽学訊問の様子。「其方ハいくつだ・○御答、

「出生ハ」とだ、○御当地ニ御座ります、三「何ンにしても身分がしつかりしない、高松が方から引取るとハ言ハないで、やつかへて無ひ杯と言ツて居るからしつかりしなべ」などという具合である。

山本 鎮雄

『にっぽん部落』

きだみのる著 岩波新書
きだみのる（一八九五～一九七五）は、本名を山田吉彦と言い、本名でフランス語のレビ・ブリュール『未開社会の思惟』（1935）、ファーブル『昆虫記』（共訳、1958）などを翻訳した。フランスに留学し、パリ大学で社会学者マルセル・モースの指導を受けて帰国した。ヨーロッパで第二次世界大戦が開始した頃、彼は八王子市恩方村の廃寺の庫裡に住みつき、十四戸からなる小さな山村部落の住民生活と心理を克明に観察し、その記録を「きだみのる」のべ

③「差別と日本人」

野中広務・辛淑玉著 角川書店
／麻生太郎が、三月十二日の大勇会の会合で「野中やらAやらBは部落の人間だ。だからあんなのが総理になつてどうするんだい。ワッハッハッ」と笑っていた。』と本書にある。そういう人物を総理大臣にしたのも国民であつた。民主主義はほど遠いと思わされた。

ンネームで『気違い部落周遊紀行』（1948）を刊行し、毎日出版文化賞を受賞した。

彼は村（むら）を構成する最も単純で複雑な地縁集団の「部落」を日本社会の原型と見なし、「日本文化の根底に潜むもの」（1956）などで特異な日本文化論を展開した。表題の『にっぽん部落』（1967）はフランス語に翻訳されることを前提にして、これまで書いた観察記録や文明批評の要点を集大成した。

私は退職を契機に、山梨県の桂川沿いにある妻の実家の畑で野菜作りを始めた。もともと、週一回、農繁期は一泊二日、農閑期は日帰りで、電車で通う半端な晴耕雨読の生活を続け、今年で四年目を迎えた。

もつばら都會で暮らし、村や部落では余所者扱いの私は、部落やその周辺の畠仕事で出会う住民と無用な摩擦を起こすことなく、多少は住民の生活と心象をわきまえておこうと考え、本書を読むことにした。

私はかつて『氣違い部落周遊紀行』を読んでいたことがあるが、そこではリアルに生活と心象の実際を（村落）社会学的というよりも、むしろ露骨に面白可笑しく文学的な表現に徹したという印象を受け、反発したことがある。

きだみのるが本書で力説するように、私は部落の最大の捷、つまり「殺傷するな」「盜むな」「放火するな」「村の恥を警察やメディアに知らせるな」という四ヵ条を守ることにしよう。きだみのるは『氣違い部落』もので法律上の違反事項、つまりプロクの密造や賭博（チヨボイチ）の開帳を世間に公表し、それをネタにして原稿料を「稼いだ」と見なされ、部落の余所者扱い同然の「村八分」にされ、一時期いざらくなつた。

高度成長期以後、農村は大きく変化した。終戦前後から十五年間、きだみのるが観察し記録した東京都下の駒込山村「氣違い部

落」も大きく変化したであろう。文学作品は別にして、文献研究によらず、本書のように参与觀察に基づく社会学的な作品は再び世に出ることもなかろう。私は野菜作りのために農村に通い、書きたい材料には事欠かない。ところが、今や村人もソフィストケートされ、農村の真相を聞きただすほどの余裕はない。

本書を読み、私の疑問の一部が氷解した。部落の土着の伝統的文化が全面的に変化したのではない。ところが、都市化の全面的に影響を受けた瀕死の農村が本格的に再生するには、農業政策の制度上の本質的な改革も必要だが、それ以上に部落住民がなあなあの伝統的な習慣を見直し、根本的な意識改革が要請されると思うようになつた。

①『本田宗一郎の人生』
中山 喬央
池田政次郎編著 東洋経済新報社
②『足利藩』 菊池卓著 現代書館
③『村落・報徳・地主制』
中村雄二郎・木村義編 東洋経済新報社
この三冊の本に共通している事は、最近

唱えられている地方の活性化に關係しその課題を解く鍵が秘められている事である。

先ず『本田宗一郎の人生』について述べれば、とにかく面白い。出身地遠州地方の伝統やらまいか（やつてみろ、負けてなるものか）精神を全身に漲らせ、物作りの権化となつて、一代で世界企業を創り上げた事はあまりにも有名である。老後の楽しみは自宅西落合に近い、新宿西口「思い出横丁」で、人知れず一杯やることだった。この魅力ある人生に惹かれて筆者は最近「本田宗一郎夢未来想造俱樂部」に入会した。

この本田宗一郎の生家から直線距離で僅か一〇kmの場所に『村落・報徳・地主制』の舞台となつた静岡県掛川在、倉真村がある。この本は明治大学が地方史研究の一環として、幕末・関東地方を中心に行われた報徳仕法が、どうして近代報徳社運動として、静岡県西部遠州地方に引き継がれ発展したのかという事を研究テーマとして、十一年間にわたり現地調査を行つた結果を、様々な角度から検討しているものであるが、小生が一番興味を持ったのは、報徳仕法のうちの「五常講」という金融制度を上手に活用して金利負担による村落の崩壊を防い

だという事である。

これと同じ事は「足利」でも起つていい。同藩は江戸末期僅か一万一千石の小藩であつたが、明治時代に創設された足利銀行は栃木全県下に勢力を拡大し、当時八万石あった県都宇都宮に現在は本店を移転している。

この足利藩も報徳仕法を取り入れていた。文久三年（一八六三）の家老の年収は、僅か八七両に過ぎず、それでも財政が逼迫するや、明治元年均祿法を実施、士族は身分を問わずすべて現米九石五斗、卒族（下級武士）を三石八斗とした。しかしその一方では自前で大砲を製造して洋式化された軍隊を持ち、戊辰戦争の端緒となつた梁田戦争への対応を誤らず明治を迎える事ができた。又足利学校内には藩校求道館と医学所を設け、庶民向けの寺小屋・私塾も数多く設けられて、その後足利銘仙等、織物業を中心経済を振興させたその進取の気性を窺うことができる。

ここで倉真村の報徳仕法の鍵を握った岡田一族の具体的方法につき若干触れて文を閉じる事したい。同郷の本田宗一郎同様「やらまいか精神」を持つ岡田佐平治が閑

与した仕法は、嘉永六年（一八五三）日光に「宮尊徳を訪ねる以前のものは「個人仕法」（家政たて直し）を目的としたものであつたが、それ以後は、佐平治自身で家計歳出入を詳細に調査、毎年米五十俵を「推薦」する事とし、その功により掛川藩より帶刀御免、五人扶持の格式を与えられて、「行政式仕法」を代行する事となつたのである。この結果、岡田佐平治・良一郎親子によつて指導された遠州報徳主義は、「行政式仕法」における領主権力による強制と「結社式仕法」における農民間の同意が極めて密接に結合し成功したのであつた。

中込 勝則

①『蘭陵王』

田中芳樹著 文芸春秋社

蘭陵王といえど、雅楽の演目でその名を知っていた位であつた。今年出版されたこの本は蘭陵王の生涯を描き、併せて彼が生きた六世紀南北朝時代末期の様相を活写している。かれは北斉第二代文襄帝の四男として生まれ、りりしい美男子で武術に秀で、戦場ではその柔軟な容貌を隠すため鬼面をつけて戦つたことで知られる。当時北朝は

北齊と北周が併立して霸を競い血みどろの戦いが何度も繰り広げられていた。

蘭陵王は本来皇帝の息子であったのだから嫡系として優遇されるべきところ、父帝が若くして亡くなつたから、帝統は父の弟武成帝に移り、彼の兄弟達は冷遇され、戦では常に激戦の最前線に投入された。その中でも常に力戦して武功をたてた。洛陽の北の邙山の戦いで北周軍を敗走させたとき、城を守る北齊軍は「蘭陵王入陣樂」を作つてその勇武を讃えた。これが唐朝で散楽に取り入れられ、雅楽にいま伝わるものとなつた。本書はかれの勇武の生涯のみならず、彼が生きた時代を活写している。

北朝諸国は北方異民族が建てた国だけに中華の王朝とは異なつてまだ血腥い臭いが濃厚で荒々しい蛮風が色濃く残つていたことが覗われる。こうしたあまり知らなかつた南北朝末期の様相をも知ることができる。尚、同じ著者には、やはり南北朝時代、男装して父に変わつて出陣し、味方を勝利に導いて凱旋した伝説の女性木蘭を描いた「風よ、万里を駆けよ」（中央公論社一九七七年）があり、これもたいへん面白い。

彼女のことは北魏の時代に作られた「木

蘭の詩」があり、現代でも中国歌劇「木蘭從軍」は日本・歐州などでも上演されている。

②『古代への情熱—シェリーマン自伝』

岩波文庫

トロイ遺跡を発掘したシェリーマンの自伝で有名な本だから、いまさら感動したというにはいささかの感があるが、改めて読み返してみると、彼が少年時代に父親から繰り返しギリシャ神話やオデッセイアなどの話を聞き、これが生涯いつかはトロイ遺跡を発見しようとの原動力になつたこと、若い頃はいろいろな商売に手を染め、失敗もあつたがついにはロシアに於いて印度藍・戦時物資などの商売で巨額の資産を築き、私財をつぎ込んでトロイ発掘に成功した。彼は努力の人で、恐るべき記憶力で何ヶ国語をも完全にマスターし、さらにラテン語・古代ギリシャ語なども学んで、これが商売上もトロイ発掘地の比定にも大いに役立つた。かれがついにトロイの財宝を掘り当てたのは一八六九年四七歳の時だった。かれはその後もギリシャのミケーネやティリンスなどの遺跡をも発掘している。

①『日本語が亡びるとき』

—英語の世紀の中で—

水村美苗著 筑摩書房

②『美しい日本語のすすめ』

坂東眞理子著 小学館

③『孤高—国語学者大野晋の生涯』

川村二郎著 東京書籍

(1)はショッキングな題であるが逆説的な日本語擁護論である。夏目漱石が「日本は亡びるね」と三四郎で語らせてているのに似る。亡びない為にはどうすればいいかを日本人全てに考えさせようとしているのだろう。「人間はある人間たらしめるのは、國家でもなく血でもなく、その人間が使う言葉である。日本人を日本人たらしめるのは日本語なのである。それも長い書き言葉の伝統をもつた日本語なのである」。国語こそ、この英語の世紀に於て初等・中等教育で最も重視されねばならないと説く。更に「日本人が日本語を実際に粗末に扱ってきたのは水と同じで『大切にしなくては』と思ふ必要もない程豊かで恵まれていたからだ。然し英語の世紀がきて『もっと英語を』の

大合唱の中で、今こそ日本語について真剣に考えたい」と警告する。

英語の世紀の中で日本語は、ラテン語に最も近い伊語、十九世紀迄最高と自負した仮語、冠たる科学技術を生んだ独語、文学の露語、詩の漢語等と何れもメインの言語ではなくなつた点で同じ運命にある。さあ、どうする。

文明はダイバーシティ（多様性）があつてこそ面白い。万物は異質に接觸して刺戟を受け、対立、抗争、融和の中で変質し、進化または滅亡してゆく。全人類が一つの性、一つの人種、一つの宗教、一つの文明、一つの言語しかなかつたならば、地球はとつぶに亡んでいただろう。

(2)と(3)も併せて読みたい。日本語は亡びるには惜しいユニーコ且優れた文明そのものであることが実感出来よう。恐らく二十一世紀の多くの若者は、卓越したバイリンガルに育ち、自信を持つて世界に雄飛していくであろう。その時、英語圏で育ち、英語のみしか知らない人は、故郷を持たない人が感じる寂寥を感じるに違いない。

『歌は心でうたうもの』

船村徹著 日本経済新聞社

この本は平成十四年に出版されたものであるが、何回読んでも感動させられる。内容は船村徹の履歴書であり、その作曲人生を書いたものであるが、「歌は心でうたわなくてはならない」という作曲哲学を、本の題名としたものである。

目次には、故郷の栃木県船生村で生れて東京へ出るまでの「望郷」、東京での作曲家目録としての「奮闘」「豊かな作曲活動」と、まさに波瀾万丈の作曲人生であるが、とくに胸を打つのは若き日の親友高野公男との交流である。残念ながら高野公男は若くてこの世を去つたが、その高野公男作詩船村徹作曲の「別れの一本杉」は作曲家船村徹の原点であるとともに、今だに口ずさまれる名曲中の名曲であり、日本人の心の底にいつまでも響くメロディーである。

もう一つ印象的なのは、美空ひばりの歌を作曲する時の、船村徹の心境である。美空ひばりの歌を作曲する時は、「美空ひばりとの戦いだ」と書いているが、船村徹は

三戸岡 道夫

どの作曲家でもそのような決意で作曲するのかと、感銘を深くした。

もう一つの感動は演歌巡礼の旅である。

船村徹は作曲活動と平行して、演歌巡礼の旅を行っている。それは船村徹の心のやしさ、温かさからである。時には老人ホームや刑務所へも慰問に行く。そのためには「希望」という曲を作詩作曲して、女性の受刑者に捧げている。

『ニッポンよ、ニッポン人よ』

という本を発行している。それは、

『生まれ育ったこの国が愛おしくて仕方

がないから、言わせていただきます』

という、船村徹の日本国への熱きメッセージである。そして二宮金次郎の曲もこの熱きメッセージの中に入るのであろう。作

詩は木下龍太郎、歌手は大金吾という絶好

の組み合せで、二十一世紀の道徳不在の世

界経済への熱いメッセージともいえようか。

なお平成二十一年三月に『人を育てる—

船村徹情歌の世界』(井上安正著・中央公

論新社)という本が出版されている。

これは船村徹の六十年の作曲生活と、弟子たちとの物語である。船村徹は日光市に

樂想館という作曲活動の館をもち、これまでに二百人を超える歌手を育ててきた。船

村徹は弟子を教育するとき、「歌は心で歌

うもの」の哲学から、弟子の歌の教育もさ

ることながら、まず人間教育に力を入れて

いる。人間として立派でなくては、心で歌

は歌えないからである。

この春、樂想館には、走祐介、カメ憲一、うちわ弾という、三人の若い内弟子がいたが、このうち平成二十一年四月に走祐介が「流水の駅」という曲でデビューした。歌はもちろん上手だが、船村教育を合格してのデビューであるから、歌も心もさわやかなすばらしい青年であり、まさに「歌を心でうたう新人」である。

宅見 勝弘

- ①『二宮金次郎の一生』
三戸岡道夫著 栄光出版社
- ②『日本で一番不況に強い男
(二宮尊徳の成功実学に学べ)』
灘澤中著 中経出版

③『米山梅吉の一生』

三戸岡道夫著 栄光出版社

『二宮金次郎の一生』は、今年の日本文芸アカデミー賞を受賞されたので、再読させていただきました。一度目でも最初に読んだ時のような感動を得ました。これは読み手側の人生や環境でも感動が違つてくる深い作品だからと思います。

大不況の時代を生き抜くには、二宮金次

郎の思想・生き方が最も必要だと感じました。私自身が職を失つて、一年間も「勤労」の徳を積んでいないので、勤労の大切さを痛切に実感します。収入がなければ支出を減らすしかないということで「分度」の思想を実践して何とか生きています。

尊徳の思想の中では「積小為大」が好きな言葉です。私は仕事が無くても「昨日よ

り今日は千分の二だけ成長しよう」と思っています。毎日、昨日よりも千分の一ずつ成長すると、一年後には一〇〇・一%の三

六五乗ですから、約二〇〇%になります。

積小為大は、大きな事業を達成したり、大きな困難を克服したりすることにも繋がると思います。これはデカルトの「困難は分割せよ」に通じる普遍的な思想だと思います。

『日本で一番不況に強い男』は、二宮金次郎の思想を七つの切り口から非常に分り易く解説しています。

どうしても報徳思想は難解という印象がありましたが、この本でその思いは氷解しました。「心田開発」「一円融合」の考え方方は、この本で学びました。

大不況の中で自分自身が生きていけるのは、報徳思想に触れたことも一因になつて

いると感じています。拝金主義的なバブルの成功論しか今の時代になれば、逆に絶望して死んでしまっているかもしれません。その意味では心を救つてくれたと思います。

『米山梅吉の一生』は、日本に「信託」業務を始めた米山梅吉の生涯が描かれています。金融界の二宮金次郎という著者の言葉通りの人生を歩んでいます。

「信じて託す」という仕事を始めた生き様が現在にも必要とされると思います。

信託という概念は偉大なもので、財産だけではなく、個人的には思考や思想などにも信託という考え方を使えるのではないかと思いません。以前にビジネス書で「思考信託」という考え方を見付け、それ以来は私も心掛けています。偉人や尊敬する人だったら、どのように考えるか、どのように感じるか、ということを常に意識します。別の言い方をすると、偉人の脳を借りる方法です。

史遊会の会員の中には、自分の思考や生き方を信じて託す相手として理想の方がいらっしゃいます。その人に自分の人生を信託するような気持ちで生きたいと思います。

「東京牛乳物語」

—和田牧場の明治・大正・昭和—

黒川鍾信著 新潮社

何故、敢えて「牛乳」と読者を絞る題名を選んだのか、著者の明大教授、英詩専門といふ黒川鍾信とは何者か。

和田家は、代々徳川将軍家に仕えた魔匠（隠密）の家柄で、維新時は丸の内に嫁養子半次郎の時代。和田半次郎は明治六年駿州から五十歳で上京、偶縁が出来た日本近代乳業の草分け前田留吉の世話を小川「牛乳搾取業」で実地修業し、八年独立。和田牛乳店の誕生である。十二年「牛乳搾取業鑑札・第拾四号」を取得。武士から転身をはかり「ハゲ半次郎」と称して家業に励み、忽ち東京市乳業界の十指に数えられるに至る。

十三年、大変な美人で才媛と語り継がれている一人娘ふくに、三国一の花婿東大菜学部専攻の該輔（旧姓久城）を迎えたのを機に、翌十四年店のすべてを譲り隠居、見事な經營者交代をする。二代目の誕生である。十七年の「高名牛乳一覧」（筆者所有）

諸橋 奏

なる大相撲番付を模した序列表で、和田は「行司」欄に位している。事業は順調に発展し、明治三十年後半から大正にかけては全盛期で、東京市乳の五傑入りを果たす。

がしかし、三代目育てに失敗する。女子忙しさのあまり、他家で乳母に五年間育てさせた。乳幼児期の人間形成は重大で、三代目となるはずの輔は商人気質とは乖離した人柄に育ち、結果、大正四年輔三十一歳の時に勘当する破目になる。この波紋は、

二代目該輔の右腕となつて三代目の代理を務めてきた長女あいの婿潤平一家の運命を狂わせ、三代目を繼いだ二男重夫にも苦勞をかける。

三代目重夫は、大正四年二十四歳で本店を任せられるや東京市乳業界の王座を目指して健闘し、九年「日本均質株式会社」を設立、十五年には「日本最初の低温殺菌牛乳」を販売すると共に「東京第一ミルクプラント」を誕生させた。

昭和三年の「新府令が許可した牛乳処理場で、低温殺菌処理を施した牛乳以外は販売してはならない」という「牛乳營業取締規則」改正は、莫大な資金、技術力、組織

力を必要とし、維新以来「家業」であった「牛乳搾取業」は「企業」へと変貌せざるを得ない時代に突入する。

重夫は、個人経営アラントの組織作りに生き残りをかけるが、五年には「森永煉乳社」がそれぞれ大手アラントを買収合併して、「森永牛乳株式会社」「朝日牛乳株式会社」を設立、市乳事業に進出してきた。

昭和十年、三代目が突然他界、この時、四代目敏子（養女＝輔の四女）は女学校に入学したばかりであった。

昭和十二年以降の日本は戦争一色、女所帯の和田牛乳は疎開、牧場閉鎖、本店の米軍による空爆焼失と日本と運命を共にする。

四代目敏子が登場するのは昭和二十九年神楽坂の名物旅館「和可菜」の経営者としてである。作家、脚本家、映画監督に愛された当館のオーナーは、四代目の実姉で輔の三女つま（女優木暮実千代＝平成二年没）、また本書の著者黒川鍾信は、彼女らの長姉福枝の息子である。

ところで、この和田牛乳四代を知ることはよりも直さず「日本牛乳史近代篇」を知ることであつた。（友の会々員）

正木 清幸

『石橋湛山評論集』

松尾尊允編 岩波書店

湛山は、明治十七年（一八八四）僧家に生まれ、明治四十年早大哲学科卒、明治四十四年『東洋經濟新報社』に入社。三十五年間を此處に過す。世上軍国主義一辺倒の中、軍を恐れず自由主義の論説を貫き通した信念と胆力に感動した。

生前『石橋湛山全集』全十五巻が『東洋経済新報社』から出版されたが、本書はその内三十九篇を精選したものである。特に感銘した一部を、要約しそ紹介致したい。

◎愚かなる神宮建設の議

人は明治の特色を帝国主義的發展の成果といふ。台湾も樺太も朝鮮も版図としたと。僕は反対だ。それは政治、法律、社会万般の制度及び思想にデモクラチックな改革を行つたのだ。東京市長の阪谷芳郎男は明治神宮の建設に奔走しておる。それで先帝陛下と明治の記念となるのか。僕はけち臭い神社などを建てず『明治賞金』を作れと奨めた。ダイナマイトの発明者ノーベルは、一介の科学者でありながら、その資産を世界文明のために賞金として遺し、永遠に世

界の人に記念されている。いわんや一国の元首、しかも前古未曾有の東西文明の接觸点たりし日本の元首である。その陛下の記念とし『明治賞金』の設定は、世界の平和文明に貢献する力は如何。『明治賞金』こそ先帝のご遺志に最も良く合致したものであろう。（大正元年十月『東洋時論』）

◎戦死者を思え、（出兵は戦談事にあらず國民は撤兵を要求せよ）

対支出兵は愈々重大な結果を起した。濟南においては、宣戰の布告無く日支開戦の状態を現し、我が政府は更に多数の軍隊を支那に派遣しつつある。この出兵のため幾千万の国費を煙にする。それは未だ我慢出来よう。但び難いのは同胞の血を外国に流す事だ。戦死した者の命は戻つて来ない。当人の不幸は申すまでも無いが、その周囲の父母妻子兄弟の悲嘆はどれ程であろうか。湛山がとくに念願としたのは、向米一辺倒の冷戦路線からの離脱であつた。湛山の登場は、政界へ新風を吹き込むものと国民に期待されたが、不幸にして病に倒れ、医師から二ヶ月の休養を求められ、首相の国会欠席は公約たる国会の正常化に背く、そして就任後僅か二ヶ月で辞職した。世人はその進退の公明さを讃嘆すると共に、余りにも早い退陣を惜しんだ。その後四年の闘病の末、昭和四十八年四月二十五日八十八歳の生涯を閉じた。

（昭和三年五月十九日号「社説」）

◎湛山政界に出馬、首相に就任

敗戦を迎えた湛山は、戦後の新報第一号に「更生日本の門出」に始まる小日本主義の復活宣言を行つた。満々たる自信を持ち、自らの経済復興計画実現のため政界入りを決意、鳩山一郎を盟主とする自由党を選んだ。昭和二十一年五月第一次吉田茂内閣に大蔵大臣として入閣、新報社長を辞し、以後G H Qの財閥解体に反対、占領軍駐留費の削減を要求するなど、G H Qの不興を恐れなかつた。昭和二十二年五月、G H Qは湛山を公職追放処分に付した。二十六年六月追放解除。三十一年十二月に鳩山首相引退の後を受け内閣総理大臣に任せられた。湛山がとくに念願としたのは、向米一辺倒の冷戦路線からの離脱であつた。湛山の登場は、政界へ新風を吹き込むものと国民に期待されたが、不幸にして病に倒れ、医師から二ヶ月の休養を求められ、首相の国会欠席は公約たる国会の正常化に背く、そして就任後僅か二ヶ月で辞職した。世人はその進退の公明さを讃嘆すると共に、余りにも早い退陣を惜しんだ。その後四年の闘病の末、昭和四十八年四月二十五日八十八歳の生涯を閉じた。

（友の会々員）

中島 茂

『遠い島 ガダルカナル』

半藤一利著 P.H.P.文庫

今年も間もなく十二月八日がやつて来る。太平洋戦争時の記憶をもつ最後の年代である私にとって、五百頁に近いこの書は忘れがたいものである。

昭和十七年（一九四二）六月のミッドウエイ海戦の大敗で空母の主力を失なった日

本軍部は、国民の士気と戦意の喪失を恐れ、事実をひた隠しにするとともに、新たな不沈空母（陸上の航空基地）の建設を急いだ。選ばれたのはソロモン諸島のガダルカナル島。日本本土から六千キロも離れた四国の三分の一ほどの島である。

飛行場建設に日本軍が乗り出したことをアメリカ側は強烈な危機感をもつて受けとめた。当時劣勢のアメリカにとって、ニューギニアと反撃の一大基地たるオーストラリアとの連絡ルートの確保は至上命題であったのである。そのため、この島をめぐつて日米両軍の間に、昭和十七年八月から翌年一月まで半年に及ぶ死闘が続いた。

著者の戦闘経過の叙述は読んでいて胸の痛むものであるが、ここではその概略と若干の感想を記すにとどめたい。

七月初日本軍はガ島に上陸、飛行場の建設に着手し、八月初に一応の完成をみたが、その後強力な機動部隊の護衛のもとにアメリカ海兵隊の大部隊が上陸し、飛行場を奪取し、周辺地域に地勢を巧みに利用した堅固な防禦陣地を構築した。

当初日本軍の中枢はこの動きを本格的な対日反攻とは受けとめていなかつた。

その後、強力な火砲をもつ近代装備の二万に近い米軍が縦深の陣地で待ち伏せるなか、日本軍は日露戦争以来の夜間白兵戦をもつて果敢に突撃し、おびただしい犠牲者を出し続けた。

大本営はガ島戦の最初から戦略的に大きな誤認を犯し、米軍の戦力を過少評価し、誤算に誤算を重ねたのである。

海軍の援護のもとに上陸した日本の大部隊も米軍の堅固な陣地を攻略できず、兵の損失を重ね、生存者はジャングルに身を潜め、餓死を待つ他なかつた。

約半年間の日本陸軍の投入兵力は三万二千、そのうち戦死者は約八千、餓死者は一

万一千を数えた。米軍側は陸軍及び海兵隊約六万人のうち、戦死者約千六百人、戦傷約四千八百人という。日米の国力と戦争観の際立つた遠いが如実に読みとれる数字である。

一月九日遂に大本営はガ島よりの撤退、他への転進を発表した。ガ島攻防戦は終止符を打ち、太平洋の戦勢は完全に逆転した。著者の半藤氏は「エピローグ」の中でこう述べている。

「……日本の軍部はこの惨たる敗戦から何も学ばなかつたのである。その後の歴史がそれをわれわれに教えてくれる。結局は同じことを際限なくくり返しつづける。いや、日本人の独善性と硬直性と無反省と情報無視はいまに通じている。」

話を現在に転ずると、バブル崩壊から二十年、日本を覆う閉塞の暗雲はいぜんとして晴れない。

一国の指導層の先見性のなさと無責任がいかに国民を苦しめるか、ガダルカナル敗戦の記録を読んで、今さらながら感じさせられた。

（友の会々員）

新井 宏

恒例の「今年の三冊」の納期に気付き愕然としたのは、アウトプットのために読んだ本と数多く送つて頂いた本を除いて、自ら選んで読んだ本が皆無だったことです。さあ、パスするしかなかつたところで、思いついたのは、史遊会の方々から頂戴したご本の礼状につけた感想文です。

それらを、そのまま紹介してお茶を濁すか。しかし、そうなると、かなりの長文になる。カットにカットして紙面が尽きたらそこで終わりとする。

①『中国江南の「歴史」と「今』を

散歩する

中込勝則著

今度もまた貴重な本をありがとうございました。前回の『トルコ・イスタンブル歴史紀行』もそうでしたが、紀行文に「歴史」が加わるとトタンに「厚み」が増します。魯迅の話、特に「藤野先生」が魯迅紀念館で大きくとりあげられていることなどを嬉しく読みました。吳越の臥床嘗胆談はやふやな知識の再確認になりましたし、科挙のこと、特に江蘇省、浙江省に合格者が多かったことなども、面白くよみました。

最近は聞かなくなつた児島高徳の「天莫空勾践時非無范蠡」も、ある時代の方々には、懐かしいものがあるでしょう。地方の武将、児島高徳がこんな詩を知っているはずが無いということで、「太平記」の史的な価値を下げたひとつの要因となつているようですが、今では、児島高徳の名を知る人もすくないのでしようね。

上海の記述も短い中で、その雰囲気をよく紹介しているように思いました。

錢弘傲については、吳越国が立国し、日本と親交を結ぶために五〇〇基の「錢弘傲塔」を贈ってきたことで知っています。

日本に残る「錢弘傲塔」は現在のところ五

基。これを以つて、三角縁神獸鏡の既出土比率も、一部学者の称えるように數10%にはどうてい到達しないのではないかということが、森浩一先生の意見です。

宋の滅亡、南宋の滅亡について、緩衝地帯の遼や金を挟み撃ちにして滅ぼしたことだが、金や元との直接対決をもたらしたためとするのが、一般的な歴史観なのでしょうが、とても参考になります。

それにしても、漢詩への造詣に感心いたしました。

②『東北古墳探訪』 相原精次著 彩流社

すばらしい装丁で、豪華な本になりましたね。総論も面白く拜讀しました。

内容的には、案内板など、雰囲気を感じながら読みました。円墳の中には、草の手入れからふくらみ方まで伽耶の古墳に実に良く似たものがあり、日本にもこんなところがあるのかと感心しました。

③『関口隆吉の一生』

堀内永人著 静岡新聞社

豊富な内容なので、ぜひ再読してから礼状をと思っている内に、別件に夢中になり、その間に、静岡県の知事も川勝平太さんに決まつてしまひました。

なによりも、幕末・明治の雰囲気が大きな構想で描かれているのに感心しました。急速に私の好みの作風にも領域を広げられているのを感じます。特に慶喜や三舟との関係が、まとまつた読み物として、とても参考になりました。それにしても、歴史の転換期に、ゴルバチヨフのような役割を果たした徳川慶喜は偉大だったと思います。次郎長に対する明治政府の取り扱いも面白く読みましたし、静岡茶の開発経過はあるほど納得しました。

平山 善之

① 「日本の原像」

平川南著 小学館

著者は現国立歴史民俗博物館館長。古代史専門であるが、考古学では異色であろう。山梨大卒。一時高校教師を勤め、後に多賀城の発掘調査に携わり、学者の道を歩む。自ら言う如く、「発掘現場育ち」で象牙の塔の人ではない。「歴史ぐらい広い視野を必要とする学問はない」というのが持論で考古学、文献学、民俗学、文学、宗教学、自然科学、およそ、ありとあらゆる学問を総動員して考え、洞察力を働かせることが歴史研究に欠かせない、とする。この方針のもと、現在、歴博では広く学際的研究が進められている。

この本は小学館が創立八十五周年企画として出した「日本の歴史」全十六巻の第三冊であるが、いわゆる通史ではない。古代史における疑問点を様々な角度から解明を進めたもので、手法は臨場感に溢れている。

例えば、第五章「海の道・川の道を見つめ直す」は下野国寒川という内陸部が実は東京湾の第二河口として重要な機能を果たしていたことを、近隣の諸川や点在する神

社考証により明らかにする。また、対蝦夷戦争の基地であつた桃生城、胆沢城、徳丹城がいずれも北上川の水運を重視して築かれたこと、基衝が磐井、平泉を根拠地としたのも北上川と東山道の接点という交通の要地であつた為であること、等を示す。さらに紀伊・上総・陸奥と続く「海の道」が、東征伝説や、陸奥に多い上総地名・鹿島神宮の存在を説明している、とする。説得力ある語り口は、高度な内容を飽きずに読み通させる。

② 「日本語が亡びるとき」

水村美苗著 筑摩書房

昨年、話題になつた本。著者は十二才から滞米二十年、エール大で仏文を専攻した女流作家である。この本の要旨は、イ、世界の普遍語として、英語の影響力は今後とも増大する。

口、日本語は現地語に墜ち、亡びる可能性が高い。

ハ、日本語を亡びさせてはならない。

ニ、一方、日本人の英語力の無さは、過去現在とも酷い。将来どうすべきか、この国は何の方策もない。

るバイリンガルを徹底的に養成すること。国は平等主義で英才教育を許さず、全員バイリンガルをめざすようだが、無意味だ。

へ、他方、国語は週二時間の学校教育を改め、週五時間にして、そのレベルを上げて、近代文学をもつと読ませるべきである。

ということのようである。

日本語は人類の宝ともいふべき言葉である。日本人は日本語を大事にしようという気がない。しかし日本語は「絶対、大丈夫」という信念を捨てなくてはならないときには來ている、という。そして繰り返し「日本の国語教育は翻訳や詩歌も含めた日本近代文学を徹底して読ませるべきだ」という。二十年アメリカでくらし、客観的な視野をもち、なおかつ、優れた史觀からの提言はまことに傾聴に値する。これに対する日本文科省の見解をぜひ聞いてみたい。

世界に伍して國益を守るには、多少の英語力ではだめだ、という。それなら徹底した英才教育で英語力は涵養したら良い、普通の人間は、英語は読んで理解出来れば良い、という。賛成である。

村上 邦治

①「考古学はどう検証したか」

春成秀爾著 学生社

昨年十一月史遊会に参加後、初めて考古学に関する本格的な研究論文集に取り組んだのがこの本である。著者は国立歴史民俗博物館教授で、これまで論文として発表されたものが収録されており、北京原人、弥生時代の年代、前中期旧石器の捏造、陵墓の比定、明石原人の五テーマについて従来の定説に挑戦し、詳細に検証している。

祝出版

瀧澤 中著

『秋山兄弟 好古と眞之』

朝日新書

法により大幅に早まるこことを、理系でなくとも分かりやすく解説している。これにより弥生時代は紀元前十世紀にまで遡ることがなるが、従来弥生時代は鉄器、米穀の開始時期と重なると言わってきた学説は再検討を余儀なくされている。倭國の見直しや三世紀邪馬台国の所在論争にも波及するものと思われる。

②「經向遺跡」

石野博信著 神泉社

旧石器発掘捏造事件については、いかに考古学的実証が重要であるかを改めて認識させられる。この事件は発掘の都度年代が遡り、ついに六十万年以上になり、メディアが過熱センセイショナルに報道、考古学ファンを一挙に増加させた。著者は発掘当時から、発掘現場、遺物の科学的検証が不完全であるとして、年代の推定には早くから問題があると警鐘を鳴らしていた。捏造発覚後再び検証し、この事件の問題点を総括している。

近世の論争として北京原人骨の行方不明事件を取り上げ、残された資料を丹念に読み解き、人骨の所在を追及している。著者の新発見もあり、これまで未知の事実を明らかにして真実に迫っていく過程は、スリラーもどきでサスペンス小説以上の迫力あるノンフィクションとして読者を興奮させ

るものである。同じく明石原人発見者の直良信夫について、戦争中という特殊な時期の考古学界を背景に、直良自身の日記を基に発掘現場を特定していくその調査追及の行動力に圧倒される。著者の、定説や学説に拘らない一貫した批判的な見方と科学的実証姿勢に魅了される一冊である。

この本はシリーズ「遺跡を学ぶ」の一冊で昨年十二月に発刊され、「邪馬台国候補地」の副題がついている。今年の十一月に大きく報道された邪馬台国卑弥呼の宮殿新発掘は記載されていない。

著者はこの遺跡の発掘に長く係り、最も熟知している第一人者で、初心者向きに易しく分析解説し、この遺跡の重要性を多方面から説明している。カラー写真、地図、図版が豊富に掲載され、見るだけでも遺跡が身近に感じられる様に工夫させているのが有り難い。三輪山の麓に広がるこの遺跡の発掘物から当時の日本中心地であることが明確にされ、この地が邪馬台国とする著者の主張には説得力がある。まして発刊一年後に整然とした建物跡と大宮殿発見により著者の主張はさらに強固なものとなつた。

太田 精一

①『歌の精神史』 山折哲雄著 中公叢書

国民学校三年の昭和二十年六月、空襲で家を焼かれた。そのため、遠州灘の海岸に近い母の実家に身を寄せ、一夏を過ごした。その間に終戦を迎えていた。

その家の叔母が、解放感に溢れ、昭和初期の歌謡曲をよく歌っていた。それらの歌には、戦災や敗戦の悲しみを優しく包み込むような力があり、希望を与えてくれた。私は、少しばかり大人の世界を覗き見るような気分になつて、詩の意味についても興味を持つようになつた。

その頃の歌は、言葉の持つ意味が、深く込められていた。詩を朗読するだけで、言葉のリズムが伝わって、そのまま歌になるような気がした。何故そうなるのか疑問を持ちつつ、今日まできた。その疑問を解く鍵を与えてくれたのが山折哲雄氏の「歌の精神史」である。

山折氏は、本書で伝統的詩歌と歌謡に底流する生命の昂揚感と無常觀を叙情という言葉で、表現している。この叙情が昭和初期の歌謡曲に込められていて私の魂を揺さ

ぶつたのだと氣付いたのである。

同氏は、「万葉以来日本人の心に一貫して流れてきた日常の言葉を詩の形に結晶させる叙情を今一度取り戻すことが、歌の精神を取り戻すことである」と説いている。

歌謡が何故日本人の心の中で生き続けてきたのか、和讃、今様、平家物語から浪花節、瞽女唄、歌謡曲、演歌まで歌謡の歴史を通して明らかにしている。本書は、その時代に生きた人間の心の叫び、風俗、社会を知るうえできわめて貴重な一書である。

②『中世日本の内と外』

村井章介著 筑摩書房

「日本は、島国で大陸とは一線を画し、独自の発展をしてきた」といわれてきた。

日本史を世界史の中に位置づけて考える作業が欠けてきたように思える。

しかし、最近、歴史認識問題を巡って、中世の姿が、注目され始めている。

東アジアも日本、中国、韓国の経済的相互依存関係が拡大し、漢字、儒教文化圏として国境のあいまいであった中世の交流の実態研究が盛んになりつつある。

本書は、中世における東アジアの交流の歴史を日本だけでなく、中、韓の資料も交え、解説した良質な入門書である。

村井章介氏の「中世日本の内と外」は、

中世の日本を、国境という概念のあいまいであつた東アジアの歴史の中で捉えている。

氏によれば、「国境という概念が固まつた現代の視点から中世を見るのではなく、国境のあいまいであつた時代として、中世を見て行く必要がある」と説いている。

現代は、交通、通信機関の発達によって、国境を越えて容易に人々の移動が行われている。国際結婚が進み、人種的偏見も薄れ、経済の相互依存関係も深まりつつある。

産業革命後、自然と国境によつて隔てられた西歐的近代国家が揺らぎつつある。ヨーロッパでは、EUが拡大し、国境が薄れ、中世の姿が、注目され始めている。

東アジアも日本、中国、韓国の経済的相互依存関係が拡大し、漢字、儒教文化圏として国境のあいまいであつた中世の交流の実態研究が盛んになりつつある。